



東京多摩プロバスニュース

第 27 号

■事務局: 東京都多摩市鶴牧 5-29-10 平田方

編集・発行: 広報委員会

電話・FAX (042) 338-7022 〒206-0034

2009・11.4

豊かな経験を生かし、多彩なプロバスライフを

第 63 回 定例会

日 時 : 平成 21 年 9 月 2 日(水)午後1時30分より

場 所 : 関戸公民館 第2学習室

お客様 : 東京多摩ロータリークラブ 志村会長様、浜崎様

出席者 : 30 名(会員数 37 名)

第 64 回 定例会

日 時 : 平成 21 年 10 月 7 日(水)午後1時30時より

場 所 : 関戸公民館 創作室

出席者 : 31 名(会員数 37 名)



ごあいさつ



理 念

1. 豊かな人生経験を
生かし地域社会に
奉仕する
2. 奉仕の機会として
知りあいを広める
3. 活力ある高齢社会
を創造する
4. 非政治的、非宗教
的、非利益的とする

副会長 鴻池敬和



わが東京多摩プロバスクラブも 6 年目に入った次第ですが、歴代の会長・幹事をはじめ各委員長達の好リードによって、全日本プロバス協議会の中でも高い評価を得ている「東京多摩プロバスクラブ」に成長出来た次第で、喜ばしい限りであります。

やはり多摩地区という緑豊かな自然環境に恵まれた立地条件を十二分に生かし、そして素質・経歴・高能力のある会員が揃っていることもあって、毎月楽しく定例会での各委員会報告や卓話・講話・座談会、さらには 8 つもあるサークル活動をエンジョイしております。

なかんずく、「世界のプロバス事情」の〈Ⅱ-4〉までもの長期連載は、全国の多くのプロバスクラブで愛読されて好評を博した由ですので、「東京多摩プロバスクラブ」としては誇りの一つと自負しております。

また、現役時代を卒業した我々プロビアンですが、後期高齢者に入っている者も、それまでの工夫・努力した健康法およびその心構えで、依然として元気で活発な活動者も多々おり、益々諸々教えられる所も多くあり、プロビアンの誇りでもあります。



第 63 回定例会 9 月 2 日 関戸公民館第 2 学習室



第 64 回定例会 10 月 7 日 関戸公民館創作室

◇◇◇ 幹事・委員会報告 ◇◇◇

1. 幹事報告

登坂征一郎幹事

- (1) 東京多摩ロータリークラブから「アンチエイジング」に関し卓話の要請があり、10月13日(火)、村上伸茲会長が卓話を実施。
- (2) 全日本プロバス協議会理事との交流会参加の件
八王子市で開催される上記交流会に、当クラブから、
 - ①ウエルカムパーティ 11月15日(日):2名
 - ②第2回全日本プロバス協議会理事会傍聴、11月16日(月):1名
 - ③交流会、同日:6名
 が参加の予定



総務委員会 10月7日関戸公民館ミーティングルーム

2. 2研修親睦委員会

増山敏夫委員長

9月16日(水)、長池ネイチャーセンター(長池公園自然園)見学会とウォーキングを行った。参加者14名。詳細はP.4記事のとおり。



理事会 9月30日ひじり館会議室

2. 委員会報告

2・1総務委員会

中村昭夫委員長

- 9月度 卓話に代わり、座談会「終戦記念日に思うあの戦争」を行い、各員よりいろいろな思い出や感想、意見が出され、あの戦争を考えるよい機会であった。
出席30名、欠席6名
- 10月度 山田喜一会員による卓話「民生委員活動について」を拝聴。各員より多くの質問、感想が出され、高齢者問題について考える良い機会であった。
出席31名 欠席5名

2・3地域奉仕委員会

神谷真一委員長

- (1) 9月4日中学校校長会、9月16日小学校校長会に蓮池守一会員と出席し、地域奉仕委員会の活動の説明をしました。両日は、「東京多摩プロバスクラブの概要」、「プロバスニュース第26号」そして「プロバスクラブ体験教室へのお誘い」を配布しました。中学校9校、小学校21校の参加がありました。
- (2) 10月7日。来秋、当クラブの多彩な趣味や体験を生かした仮称「オープンプロバス」を公民館等で開催することになりました。地域奉仕委員会を軸に他の委員会より実行委員を選んでいただき、その協力を得て序々に進めて行きたいと考えます。先に南豊ヶ丘小学校より要請の国際理解教育教室は、中村昭夫、関根正敏両会員の協力を得て11月に行うことになりました。

2・4広報委員会

滝川益男委員長

今月から会報「東京多摩プロバスニュース」の執筆依頼を文面で行うこととし、その注意事項を10月定例会で大澤副委員長が説明した。

◇◇◇ サークル活動 ◇◇◇

ゴルフサークル

楠 慶二会員

今年2回目のゴルフを前回と同じ、花咲カントリークラブで行いました。鈴木達夫さん、登坂征一郎さんに初参加の北村克彦さん、私(楠)のメンバーです。
絶好のゴルフ日に恵まれ、長袖では汗をかくぐらいです。成績の方は皆さん今いちでしたが、登坂さんがパーディーを2つも取るなど実力の片鱗を見せつけました。優勝は前回に引き続き鈴木さんでした。

プレーをしながらの楽しい会話で素敵な一日を過ごすことができました。
右は登坂さんの豪快なティーショット



美術サークル

山田正司会員

夏から秋にかけての多摩の風景は、山、川、街の様子の変化にいつも心が踊らされる。

わが美術サークルの活動も相変わらず盛んである。原則毎月の第2日曜日に決められた野外スケッチの会は、8、9月は小山田緑地で実行された。岡野、鴻池、上田、増山、関根、山田会員の他に多摩市民美術協会の女性会員3人の参加となった。トンボ池近辺を拠点に各人お気に入りの写生ポイントで午後2時半頃まで自由に画いた。帰りには全員バスで多摩センターまで同乗して、駅近くのお店でビールなどで喉を潤しながらの講評会をするのももう1つの楽しみとなっている。

このサークルの特徴は、各人の画風がそれぞれに異なり、実に個性的で楽しくお互いが刺激し合える点にあると思う。10月は晩秋の多摩川風景を府中市側から画いてみようとの試みである。



小山田緑地の竹林の陽ざし（山田会員画）

俳句サークル「筈句会」

蓮池光枝会員

俳句サークルも今年の11月で28回の例会を迎え、毎月第一金曜日午後6時から関戸公民館で“からまつ句会”主宰の由利雪二先生と石川春兎先生のご指導を頂きながら8時過ぎまでの会。

現在会員はプロバス以外の人も含め男性11名、女性2名の計13名で、会名を「筈句会」と改めました。句会は、前回に提示された兼題、例えば5句を提出し、その一覧を詠みその中から5句選句することから会は始まります。選句されたものを春兎先生が読み上げ、その句は私のものと俳号で名乗り、このときに誰の作か分かります。

次に互選5句の中で最もよいと思った句の評や感想を発表し合い、それに2人の先生の評や推敲を頂き、その後雪二先生から作句の基本の季語やリズム、感性を呼び起こす17音に纏める技法についての講義を頂きます。

今は生活体験や趣味、自然観のにじみ出た作品が多くなり、合評のときは和気藹々、勝手な解釈と評論でまさに時の経つのも忘れて話が続きます。

会員の皆さんの“わたしの一句”を掲載します。

とこ
川床涼し暮色四条に風囃子
多摩川の鵜飼語りし古老あり

池田 玄海
岡野 流馬



10月度句会「筈句会」の一風景

初釣りや波間に富士と浮子揺るる	神谷 猛虎
一本杉絵にした時から秋扇	鴻池 海然
木から木へ声遠ざかる法師蟬	鈴木 透水
木下闇和顔溢るる百羅漢	登坂 爽風
振りおろす鍬先ゆるく蝶よぎり	蓮池 秋霜
G.O.の声待つ犬櫓に雪吹ぶく	阪東 浮草
綾取りの十指を包み青嵐	増山 胡桃子
唄に重ね遠き想いや ^{ちまき} 粽むく	三木 台水
^{くつろぎ} 寛ぎの朝餉の後の初鏡	蓮池 光花

グルメサークル

阪東照子会員

10月14日。バス停桜ヶ丘カントリークラブ前下車0分の、静かな親しい友人宅のようなフランス料理店「エルダンジュ」。参加会員の中には1時間以上歩いて来た方、日焼けして砂漠から帰還した方、昇り坂続きで汗かいた方等々もいて、男性15名女性3名が集いました。シェフの豊嶋誠司さんは葉山や神田の学士会館、銀座レ・ザンジュなどで修行をした新進気鋭のシェフ。村上会長の乾杯で次々に運ばれる料理。何れも絶品。

ワイン、ビールと杯を重ねて、席を移動する人、話の止まらない人等大いに盛り上がる。料理一流、盛付けオシャレ、量も程良く皆様ご満悦。集合写真の後、健脚のご仁は前庭のミニ花壇に送られて、秋日和の丘へと散る。

滝川益男リーダー曰く「何れは築地へ……」と。次回への期待深まる感謝の一日。お世話かけますが、これからもよろしく。ご馳走様。



「エルダンジュ」前のテラスで

◇◇◇ 秋のウォーキング ◇◇◇

八王子市長池ネイチャーセンター見学の記

研修・親睦委員会委員長 増山敏夫

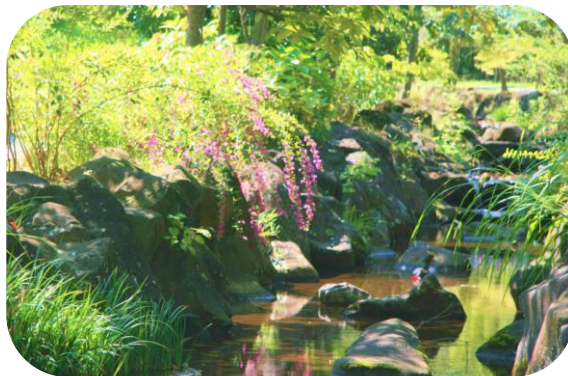
9月16日(水)実施、参加者14名。

多摩の里山がそっくり保存された長池公園・ネイチャーセンターでは、住民に対する様々な活動が行われているとあって、里山歩きを兼ねて、里山の自然に関するレクチャーをお願いした。

堀之内駅集合の後、麗らかな秋日和の中、「せせらぎの道」を約30分、センター隣接の見附橋迄のんびり歩き楽しむ。緩い傾斜に沿った旧住宅公団出色の設計に成るこの「せせらぎの道」は、その両側に計画的に集合住宅が造られ、住宅と道との間に好ましい応答関係を造り出そうとの思想のもとに出来ている。せせらぎを覆う樹木や水草が年月とともに馴染んで人工を感じさせない。

センターは、里山の頂きに目立たないように建っていた。室内は自然光を大きく取り入れ、屋根は太陽熱を空気集熱する理屈で導き出されたユニークな形態。また建物の構造は日本古来の木造伝統工法の新しい解釈を試みており面白い。決して過剰なデザインではなく落ち着いた建築である。前庭では絶滅危惧種の草花の保存育成も行われており、屋根の緑化も活動の一環として行われていた。

館内で研究員の大沢敦氏に活動内容と公園の説明を受けた後、氏の引率で約1時間、園内を観察しながら歩く。東北大院卒のこの好青年は本当に自然生物がお好きらしく、脳の活力の衰えた老々共にも児童に接する如く丁寧なレクチャー、また楽しそうにカブト虫、



「せせらぎの道」の水路とそこに咲く萩



長池見附橋を背景に参加者メンバー

ドングリなどの話をしてくれた。奥まった所に暗い水面があった。水源であり、サンクチュアリー・の長池である。しかし、ここもザリガニや外来魚類が住みついているという。

里山とは本来、人の営みの循環の中で成立していた自然で、

雑木もある周期で伐り、利用・更新していく明るい森である。長池公園の森は20年周期で更新計画がたてられているが、なかなか手が回らなく、木々が大きくなり過ぎているのが実情という。

この鬱蒼とした森の秘密は人手・予算不足の皮肉な結果なのである。屋なお暗い秘密めいた森がニュータウンの中にあるのも魅力的なことと、複雑な思いにかられました。

団栗や子供が好きとボンと跳ね

◇◇◇ ハッピーバースデー ◇◇◇

9月10月の誕生祝に夫婦箸贈呈

関根正敏会員記

今年8月から、毎月の例会で誕生月を迎える会員を祝福し、記念品を進呈することになりました。

9月は鈴木達夫、関根正敏、登坂征一郎、永井岩男、増山敏雄の各会員、10月は大熊妙子、熊本房義、中村昭夫の各会員が誕生月を迎えられ、鴻池敬和副会長から奈良井宿の漆工房で作られた「蛸」字入りの「夫婦箸」が手渡され、出席者全員による恒例の「ハッピーバースデー」の合唱で賑やかに祝福されました。



左から登坂、増山、中村、永井、鈴木、関根の各会員

「豊かな経験を生かし、多彩なプロバスライフを」

村上伸茲会員

平成 21 年度のスローガンを実行するために、心に留めておきたいことをまとめました。

第一は、健康に留意したいということです。現在、会員の平均年齢は 74 歳です（女性会員を含まない男性会員のみの値）。老いと上手に付き合い歳を重ねていくという「ウイズ・エイジング」の考えに沿って生活したいものです。どんな老化現象にもそっと寄り添い、生活上の不自由さはなるべく生じないように知恵を絞るという、その人らしさを保つ工夫をしたいものです。日本にはまだ謙譲の美德や協調の精神は残っていて、日本人の誇るべき長所です。これらを、次の世代にぜひ伝えたいものです。

第二は、会員の所有する豊かな経験の活用です。これは会員が持つキャリアであり、多様な文化・価値観であります。これらの財産を卓話や自由討論（座談会）でプロアクティブに出していただいて共有し、たがいに議論したいものです。

日本の東西の文化の違いや、料理の作り方の違い、



習慣・マナーの違いなど、文化の多様性について例を報告しましたが、これらは、個人の考えの多様性、個人の遺伝子配列の多様性に起因するものと思います。個人の経験・文化の多様性を生かすためには、次のことが必要だといわれています。（スコット・ペイジ著「多様な意見はなぜ正しいのか」より）。

●多様な意見を「集合知」に変える努力をすることである。自分とは違う経験・価値観を持つ人に出会ったら、「才能ある自分」と「才能ある彼ら」が共生して、「さらに才能ある自分たち」になれる。●多様性は超加算的である。多様な観点と多様なヒューリスティックな（発見や経験による）知識は、連続的に組み合わせられて問題解決に用いられる。●多様な集団は、違いによってさまざまな事態に対応できるだけでなく、違いを組み合わせでより良い解を作り出すこともできる。

さあ、多彩なプロバスライフ（平成 21 年度活動計画）を楽しもうではありませんか！



菊花（永田宗義会員撮影）

* * * * *

地域での民生委員の役割

山田喜一会員

皆さんに地域で活動をしている民生委員について、少しでもご理解いただければとの思いで、「民生委員の役割」について話をいたします。

・民生委員の職務

民生委員の職務についてですが、制度が始まった頃は、経済的に困っている人を支援することが主だった業務だったので、民生委員というといまでもそのイメージが残っているようです。社会情勢の変化に伴って福祉の諸制度が大きく変わり、民生委員のあり方も変わってきました。

いま、民生委員の一番の役割は、自分の住んでいる地域で、老後のこと、介護のこと、子育てのことなど日常生活をしていく上での心配ごとや悩みを抱えている人たちを把握し、その人の立場にたって積極的に相談にのることです。そして、相談者の悩みや困っていることに対して、最も適した制度を勧めたり、その制度を利用するための方法をアドバイスしたり、時には相談者に代わっても申込みをしたりと言うような支援活動を中心に行っています。



民生委員としての活動の第一歩は、「心配ごとや悩みを抱えた人たち」の把握です。まず、問題を抱えている人が自分の生活困難や S O S のサインが出し難い状況の中では、民生委員の日常生活における見守りや気付きが、大変大事な役割を担っています。

・「見守り」活動

見守りを始めるにはいろんなパターンがありますが、大きくは三つに分けられます。

第一のパターンは、行政から提供された 70 歳以上の一人暮らし世帯と高齢者世帯の情報をもとに行う訪問活動によって問題を抱えている見守りの対象者を把握します。この訪問活動を毎年 10 月、11 月を友愛訪問月に定めて集中的に行っています。それ以降、見守りを必要と思われる方については、定期的な訪問活動を継続します。

第二のパターンは、住民の方からの通報によるものです。「お隣りの方がちょっと様子がおかしい、民生委員さん来てくれる」「配食のお弁当がタベから玄関に置いたままになっているけど、中で倒れているのでは」——もちろん、ご近所からの通報は高齢者のことに限ったことではありません。子どものこと、近隣とのトラブル、ときには夫婦喧嘩の仲裁にも駆けつけたこと

があります。また、ご近所からの通報で駆けつけていっても、結果的には旅行中だったというような思い過ごしもよくあります。

このように地域からの通報をいただくことによって、私たち民生委員もまた地域の皆さんから支えられていることを実感しています。

第三のパターンは、行政や包括支援センターからの見守りの依頼によるものです。

その他、学校からの不登校児の見守りや児童相談所からの見守り依頼などもあります。

・これからの課題

住み慣れた地域で安心して生活し続けられるには——当たり前のことですが、地域に支え合いの輪を如何

につくっていくかということです。それには、第一に地域に多くの見守りの目をもつことです。高齢者の「あれ、どうしたのかな」「あの人ちょっと心配……」という状況を、地域みんなが日頃生活の中で気付き見守る——かつては地域社会の中で自然に見守りが行われていたように。そんなネットワークが自治会・老人会・民生委員などがお互いに協力し合って構築できないかなと思います。

人と人とのつながりを大切にし、お互いに顔の見えるネットワーク……「新たな支え合い」仕組みを私たち民生委員は、皆さんとともにこの多摩の地に根付かせて広げていくことを申し上げ、私の話を終わります。

◆◆◆ 座談会 ◆◆◆

「終戦戦記念日に思うあの戦争」 中村昭夫会員記

9 月度例会での座談会において 64 回目の終戦記念日を迎えたあの日を思い出して、当時の思い出を語り合った。



何人かの会員は出征して戦地で終戦を迎えた人たちもあり、多くの会員は当時中学生や小学生であつたり、中には幼児であつたり生まれたばかりで記憶がまったくない会員もいる。

小・中学生であつた会員たちはほとんど疎開をしていて疎開先で終戦を迎えた人たちが多く。戦時中多くの男子たちは「天皇陛下のために死ぬ」と言われて軍国少年として育った。

終戦日を迎えたその日、玉音放送を聞いて小学生の会員たちは雑音が激しく何のことも判らなかったと感じた人たちが多く、召集されていた人たちはこれで家へ帰れる、また多くの大人たちは負けても悔しいとは思わなかったなどの感想であつた。しかし大多数の人たちの頭に過ぎったのは、これから日本はどうなるのか、という心配であつた。当時は食糧不足がひどく食べるものを確保するのに精一杯の毎日だった。またアメリカが進駐してきたら日本が占領地でやってきた弾

圧と同じように、何をされるか分からないという恐怖を持った人たちも多くいた。今までお国のために死ぬ、徹底抗戦しろ、などと言っていた大人たちが終戦を迎えたたとんにまったく変わってしまったことに驚き、戸惑った子どもたちも多かった。戦地で厳しい体験をした人たちは復員してきても戦地の状況を一切話さなかったり、あるいはただ黙っていた人が多くいたとのことである。戦地では、語りたくないような悲惨な行動を強いられた兵士たちが多くいたのであろう。

終戦後、日本は進駐軍による極東裁判で戦争責任を問われた軍人や政府官僚が何人かいたが、これらの判決は進駐軍によるもので、日本人自らが戦争責任を追及することはなかった。また「天皇陛下ばんざい」と言って死んでいった多くの人たちに対して国が一つも謝罪していない、多大な損害と迷惑をかけたアジアの国々に対する謝罪もしていないのは残念である、との意見も出された。これらがあの戦争をうやむやにしていることもあるのではないだろうか。

いずれにせよ、あの戦争がどうのこうのという議論はあるが、詰まるところ、これからの日本はどうあるべきかが大事と思う。これらの意見を踏まえて、後日討論する機会をつくりたいとのことで座談会を終えた。

🍀 永田宗義会員が写真展を開催中(10月27日—11月14日)



永田宗義会員が、独特な店構えで知られている貝取のコーヒーショップ「白樺」で個展を開催している(写真左はポスター)。北アルプス、谷川岳などの山々や昭和記念公園、新宿御苑、浜離宮庭園などの紅葉風景、色とりどりの花の写真など 31 点が店内の壁面いっぱい飾られている。初日には広報委員会のメンバーが編集作業の打合わせを兼ねて鑑賞した(写真右)。



「中央アジア・シルクロードの旅」 岡野一馬

私のライフワークであるシルクロードの旅（西安からローマ）は、2012 年に達成する予定である。ただ自分の好きな国や場所を点々と歩いているだけであるが…。

今年はウズベキスタン、カザフスタン、ロシア南部を15 日間訪れて来た。仲間は15 名（男10 女5）で、いずれもシルクロード狂、一日20km 歩くのでは物足りない猛者である。しかし今回は、車と歩きを混ぜながらの観光主体の旅をした。それでも一日10km は歩いている。

9/26——成田を発ち、韓国インチョン経由ウズベキスタンの首都タシュケント着、翌9/27 空路ウルゲンチへ。車でビヴァに行く。

ビヴァ（私は10 年前に訪れている）は17 世紀、ホレズム帝国の首都として栄えた。イスラームの聖都となり、外敵の侵入を二重の城壁を造って守った。内側の城壁に囲まれた内城イチャニ・カラには、多くのモスク、メドレセ（神学校）、ミナレット（光塔）が残され、1990 年世界遺産に登録された。

9/28——1500～2000 年前の遺跡トブラク・カラ、アヤズ・カラを訪ねる。

9/29——私の最も関心のあるアラル海を見る。アラル海は人間が引き起こした環境破壊の典型として知られている。流れ込む河川の水が綿花栽培のため、過剰に利用され減少しアラル海が干上がっている。第二次大戦の記念碑のある展望広場は海岸に面していたそうだが、今では海岸線が約50km 先にあるという。目の前の砂の海に、鉄の錆びた赤茶色の廃船が点々と残されていた。無残な船の墓場をスケッチする。

9/30～10/3——ムイナク、ヌクス（ウズベキスタン）アテラウ（カザフスタン）を訪ねる。

10/3——アスドラハン（ロシア）に入る。ヴォルガ川がカスピ海に注ぎ込む河口の都市。雄大なヴォルガの流れと

黄葉のポプラ林の美しさに感動する。中州に街があり、川巾は十数 km か。長さは三千数百 km でロシアを縦断しているという。夜、満月の岸に立ち、ヴォルガの舟唄を合唱した。



帰国したばかりの岡野会員（エルダンジュで）

10/7——ヴォルゴグラードに着き、ヴォルガ川の水を利用した巨大なウォルスカヤ水力発電所を見学する。

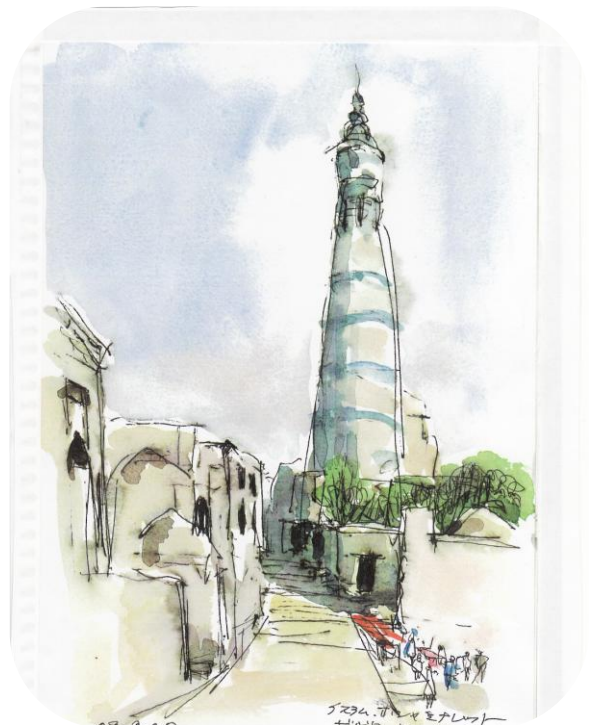
10/8——ヴォルゴグラード市街見学。第二次大戦中、ドイツとの最も激しい戦場となった所で、有名な「スターリングラード攻防戦」のパノラマを博物館で見る。1943 年7 月～44 年2 月の戦いで、ロシアは、又も冬将軍に援けられたようだ。

10/9——前夜空路モスクワに着く。此処は二度目である。クレムリン、赤の広場など駆足見学し、夜、空路モスクワを発ち韓国経由で10/10 帰国した。

旅は楽しい。毎回新しい発見と出会いがある。来年もシルクロードの続きを夢見ている。



アラル海の廃船（ウズベキスタン） 筆者画



ミナレット（光塔） 筆者画

◇◇◇ 他団体との協力連携活動 ◇◇◇

「ワールドキャンパス」(WORLD CAMPUS) に協力 地域奉仕委員会 蓮池守一

「世界の若者と多摩市民の交流」を目的に、「多摩市国際交流センター」(TIC) 傘下の市民ボランティア団体が企画運営する活動が「ワールドキャンパス多摩」(WORLD CAMPUS TAMA) で、今年で6年目を迎えています。この活動は渋谷区に本部のある NPO 国際教育団体の下で多摩市を含め広島市・長崎市等6都市を巡るもので、多摩市には7月13日から8日間ホームステイ滞在し、交流しました。

参加青年はヨーロッパ・アフリカ・北南米・アジア・イスラム圏等の諸国からの20名と日本のツアー参加者で、小学校訪問や市長訪問、TIC 会員や市民による日本文化の紹介・実演等の交流を行いました。また中央大学生との交流や多摩市と東京発見ツアー(秋葉原・渋谷など)をし、最後に「ありがとうイベント」と称して参加者が自国の歌やダンスの披露、「子ども達と平和」をテーマにした合同ゲキナドデ交流の輪を結びました。



多摩市を訪問した各国のワールドキャンパス参加者

当プロバスクラブでは、他団体との協力連携の一つとして会員有志によるイベント参加や資金カンパ協力等を行い、以前には小西加葉子会員と地域奉仕委員会による「なぎなた」演技と体験教室を行った経緯もあります。ある国の若者が日本への参加を悩んでいたが滞在を通して日本観が大きく変わり、帰国したら正しい情報を仲間に伝えたいと語った言葉が今も心に残っています。今後もこれらの活動に、プロバスでできる協力を重ねていければと思っています。

◇◇◇ 新入会員紹介 ◇◇◇

北村克彦会員

’39年6月、長野県駒ヶ根市生れ、
’62年4月NHKに入局。長野、新潟、
郡山、東京で放送番組の制作、送出、
送信機器の保守、受信技術および放
送設備全般の整備計画などに従事。



’96年、定年退職後、松下電器(株)で放送機器の開発、

販売のアドバイザーとして5年間勤務。その後、地上デジタルTV受信機開発協議会で放送局と受信機メーカーの送受実験の事務局に勤務され、一貫して放送技術分野で活躍されてきました。

現在は植物に関心を持ち、ウォーキング、登山、写真、ゴルフなどを楽しまれております。(登坂征一郎会員記)

◇◇◇東京多摩プロバスソング◇◇◇

作詞 池田 寛
作曲 中村 昭夫

聖の桜仰ぎつつ 多摩の流れに身を清めて
緑の杜に囲まれた 我が故郷の行く末と
社会奉仕に力をそそぐ
集う我等プロバスクラブ
プロバス プロバス 多摩プロバスクラブ

霊峰富士を仰ぎつつ 心の業を磨き合い
豊かな知識身につけて 次の世代の若人の
教え導く糧となる
集う我等プロバスクラブ
プロバス プロバス 多摩プロバスクラブ

◇◇◇ 編集後記 ◇◇◇

◆散歩をしていると落ち葉が足元に舞う、爽やかな季節となりました。

◆西安・ローマ間のシルクロード踏破を目指す岡野一馬画伯が、今年はウズベキスタンとカザフスタンを訪れ、美しいスケッチを添えた旅の報告を寄稿されました。

◆今号より定例会の「座談会」の模様を随時掲載します。今回のテーマは「終戦記念日に思うあの戦争」、中村昭夫会員が執筆しています。

◆「サークル活動」では蓮池光枝会員が句会の報告を、坂東熙子会員がグルメサークルの感想を、ともに女性らしい優しい筆致で綴っています。鴻池敬和、楠慶二、山田正司、増山敏夫、関根正敏、村上伸茲、山田喜一、蓮池守一、登坂征一郎各会員の執筆努力に感謝します。

◆広報委員会では今号から、各委員がM新聞の「新聞用語集」を片手に誌面充実を目指すことになりました。

☆2009年11月 編集委員会一同